

43) Sirolimus Eluting Stent, Cypherの短期および中期成績
(静岡県立総合病院循環器科) 為清博道・土井 修・吉田 裕・森脇秀明・鍋木敏志・大林和彦・三宅章公・吉谷和泰・杉山弘恭・神原啓文

Cypher stentを用いてPCIを施行した162人, 265病変の短期および中期成績を検討した。主な対象病変は, ステント内再狭窄 54 (20.4%), 慢性完全閉塞病変 32 (12.1%), 入口部病変 34 (12.8%), 分岐部病変 92 (34.7%)。対照血管径 2.77 ± 0.68 mm, 病変長 16.2 ± 11.3 mm。初期成功率 98.1% (260/265)。亜急性血栓性閉塞1例, stent内血栓1例, non Q MIを3例認めた。平均 137.6 ± 56.3 日でのfollow up CAGでの再狭窄率は13.6% (16/118病変)。透析患者では非透析患者に比べ再狭窄率が有意に高かった。(35.3%:6/17病変 vs 9.9%:10/101)。また透析患者2例で興味あるIVUS像を認めたので報告する。

45) DESの特性を生かした分岐部stent (Crush, SKS)のIVUS所見
(大垣市民病院循環器科) 森田康弘・曽根孝仁・坪井英之・武川博昭・森島逸郎・里田雅彦・上杉道伯・森川修司・林英次郎・高木健賢

【症例1】67歳女性。#6, 9に対してDESを用いてCrushを行った。IVUS上はstentの拡張は良好で側枝のjailも認めなかったが, crushされ3層重ねとなったstentが描出され, 薬剤過多あるいは過少が危惧されたが6ヵ月後に有意な再狭窄を認めなかった。【症例2】72才男性。#12, 13に対してDESを用いてSKSを行った。IVUSでは同径のstentにもかかわらず拡張は不均一だったが, 6ヵ月後に有意な再狭窄を認めなかった。症例3, 78才男性。#7, 9に対してDESを用いてProvisional Tを行った。IVUSでは側枝のstentが本管にはみ出しているものの側枝, 本管とも拡張は良好でjailも認めなかった。crush, SKSはあまり良好なIVUS所見ではなかった。

46) 急性心筋梗塞患者にCypher stentを留置後, 急性冠閉塞を来した一例
(鈴鹿中央総合病院内科) 藤田 聡・市川和秀・澤井俊樹・北井珠樹・暮石恭子・宮原真敏・山本伸仁・浜田正行

54歳の男性。胸痛を主訴に救急外来を受診し, 前壁中隔心筋梗塞と診断され緊急CAGを施行。LAD#7 100%であり, 同部に対しPCIを施行。血栓吸引後, 動脈硬化の強い病変であったため3.0-23mm Cypher stent留置を行い, アンギオ上良好な拡張を得終了した。しかし帰室1時間後に胸痛再発し再度CAGを施行。LAD#7 stent近位で急性冠閉塞を来し, 血栓吸引後stent近位部に4.0-14mm bare metal stentを留置し良好な拡張を得終了した。急性冠閉塞の原因として第1回PCI後のMSA 5.9mm^2 と比較的良好保たれていたが, stent外近位部のPlaque burden 71%と近位部に病変を残したこと, 患者の後天的な血栓性素因が急性冠閉塞に関与したと考えられた。

47) Sirolimus-eluting stent留置後6ヶ月で狭窄を認めた1例
(三重大学循環器内科) 山中 崇・岡本隆二・栗田泰郎・谷川高士・北村哲也・伊藤正明・井阪直樹・中野 超

58歳男性。1年前に狭心症を疑われ当院を受診。冠動脈造影上, 左前下行枝 (LAD) #6 75%, #7 90%と有意狭窄を認めたため, #7に対しPCI (POBA) を行った。半年後の確認造影上LAD#6 90%, #7 90%であったため, 両部位に対しSirolimus-Eluting Stent 留置 (Cypher: #6 $3.5 \times 23\text{mm}$, #7 $3.0 \times 23\text{mm}$) を行った。Stent areaは重なり部で 7.3mm^2 であった。さらに半年後の確認造影ではステント近位端に50%, ステント内重なり部に75%狭窄を認めた。血管内エコーでは近位端には偏心性の狭窄を認め, エコー輝度から内膜増殖と考えられた。また重なり部には求心性の狭窄を認めたが, エコー輝度が低く, 血栓と考えられた。

49) 繰り返すステント再狭窄に対してDrug Eluting Stent (CYPHER™) が著効を示した一例
(済生会松阪総合病院内科) 千賀通晴・森谷 勲・濱口富弥・田中淳子・垂見敏明・青木俊和・須川正宏・林 弘

74歳男性。狭心症, 高血圧および高脂血症の既往ある。1994年に不安定狭心症にて右冠動脈に対してPCIを施行した。2002年の確認造影で, 左前下行枝 #6-7に90%狭窄をみとめたため, 同部位に対してベアステントを留置した。半年後の確認造影でステント再狭窄をみとめたため, カッティングバルーンを用いてPCIを施行したが, その後も再狭窄を繰り返し, カッティングバルーンおよびパーフュージョンバルーンを用いてPCIを繰り返した。2004年の確認造影にて同部位にステント再狭窄をみとめたため, 薬剤溶出性ステント (CYPHER™) を追加留置したところ, 7ヶ月後の確認造影ではステント再狭窄はみとめなかった。CYPHER™を用いたPCIはステント再狭窄に対して有効な手段となりうると考えられた。

52) 心筋梗塞後心不全に対するオルメサルタンの効果
(岐阜大学再生医科学再生応用循環器内科学) 金森寛充・竹村元三・李 一文・李 龍虎・宮田周作・岡田英志・江崎正泰・湊口信也・藤原久義

ARBは心筋梗塞後の心不全やリモデリングを抑制すると報告されているが, その機序は線維化の抑制以外は不明な点が多い。我々はマウスにて心筋梗塞を作成し, 3病日より浸透圧ミニポンプを用いolmesartan (10mg/kg/day) を投与した。コントロール群として非治療マウスとhydralazine投与マウスを用いた。心筋梗塞後4週後にて心機能, 生存率ともにolmesartan群でコントロール群に比し明らかな改善が認められた。また同群では心筋梗塞1週後の肉芽組織細胞のアポトーシスの有意な減少を認め, 4週後梗塞領域の壁厚並びに非心筋細胞数の有意な増大を認めた。以上よりARBは心筋梗塞亜急性期の肉芽組織細胞アポトーシスを抑制することで慢性期の壁厚を保ち, 心不全やリモデリングを抑制すると考えられた。

57) リード留置困難のため, 左室ペーシングの予定が両室ペーシングに変更となった拡張型心筋症の一例
(公立陶生病院循環器科) 長内宏之・横井健一郎・中谷理絵・三宅裕史・松井裕之・浅野 博・味岡正純・酒井和好

症例は78歳女性。平成13年5月より拡張型心筋症によるうっ血性心不全にて入院を繰り返していた。平成16年12月中旬より夜間の呼吸苦, 咳が出現し12月24日外来を受診した。胸部写真にて胸水の増加あり入院となった。心電図は左脚ブロック型, QRS156msec, 薬物療法での心不全コントロール困難であり心臓再同期療法を検討した。前検査にて左室ペーシングで心機能の改善あり1月26日ペースメーカー植え込みを行った。術後8日目にリードの移動にて再手術を行ったが, タインドリードの挿入困難でありアティンリードに変更したところ容易に挿入可能であった。アティンリードへの変更に伴い両室ペーシングを行ったが臨床的には, 症状, 所見共に改善を認めている。

59) 左上大静脈遺残を有する拡張型心筋症に両心室ペーシング植え込みを施行した一例
(総合病院聖隷浜松病院循環器内科) 杉浦 亮・岡 俊明・松本延介・芹沢直紀・原田明子・池田宏美・八代 文

症例は60歳男性。拡張型心筋症の診断で通院中。2004年6月心不全の診断で入院。心電図上心房粗動 (AFL) と完全左脚ブロックを認め左室駆出率は34%と低下していた。電気ショックにて除粗動後カテコラミンの投与にて心不全は改善し7月に退院した。2004年10月再度心不全が出現したため, 2005年1月再入院となった。AFLに対するアブレーション施行時に, 電極カテの走行異常があり左上大静脈遺残 (PLSVC) と診断した。AFLの加療後, 右上大静脈経由で右前胸部に両室ペースメーカー植え込みを行った。その後心不全の再発なく経過良好である。PLSVCは人口の0.3~0.5%, 先天性心疾患の2.8~4.3%に認められる。過去の国内外のPLSVC経由のペースメーカー植え込み症例と合わせ報告する。

63) Tachycardia induced cardiomyopathyをきたしたPJRTの一例
(静岡市立静岡病院循環器科) 大谷速人・牧野有高・杉山博文・井口守丈・横山 拓・嶋根 章・村田耕一郎・小野寺知哉・滝澤明憲

50歳 男性【主訴】頻拍発作【現病歴】平成16年5月~頻拍発作あり。不整脈を指摘され, 9月21日総合病院受診, モニター心電図では洞調律とPSVTを繰り返していた。薬物療法でコントロールを試みたが, 洞調律を維持出来ずPSVTを繰り返していた。カテーテルアブレーション目的で転院。【経過】心電図はlong RP tachycardiaであった。エコーでは全周性に壁運動が低下していた。左房後中隔の減衰伝導特性を示す頻拍であり, カテーテルアブレーションを行なった。アブレーション後心機能は正常に戻った。【結語】PJRTは薬物抵抗性であり, コントロールに難渋することがあり, カテーテルアブレーションが有効であった。